

うに夜明けとともに家を出ました。

手荷物を預け、釜山行きの汽車に乗るために、その夜は駅ホームで夜を明かし、翌日は宿を探し無理に頼んで一泊、翌々は各地より押し寄せるたくさん引揚げ者とともに、収容所に入れてもらいました。

収容所は学校の教室で、ここで五、六日待ち、ようやく連絡船に乗ることができ、忘れもしない十月九日の朝、博多港に上陸。

夢に見た祖国日本、戦いに敗れても、私達には、祖国があると涙を流して喜びました。博多の駅近くに宿をとって二泊して、東京行きの列車に乗りましたが、山陽線が水害のため、山口県の柳井駅下車、伝馬船に乗り換え、尾道まで瀬戸内海を船で行き、尾道駅から東京行きの列車に乗り、途中京都駅に下車、一泊、ここで食糧等を手に入れて、背負ってきた荷物を手荷物のチッキとして預け、目的地の千葉へ出発しました。

内房線の上総湊駅を下車、駅前の旅館に宿を取り、先に引揚げている家内の妹の実家を訪ねました。農業を始める約束でしたが、帰国したら耕作地を返してもらえ

ということであったが、終戦とともに小作人の心も変わり、返してもらえない見こみはなく、住む家は狭く、私達七人を受け入れる部屋もないので諦めて、生まれ故郷の群馬へ行くことにしました。

金古に住む弟の家に世話になることになり、引揚げ後やっと、足を伸ばして寝ました。

榛名山麓の相馬ヶ原旧陸軍演習場跡地に入植したのですが、米軍の接収で、立退きを余儀なくされ、現在地の吾妻町荻生の国有地の開放を受けて入植、現在にいたっております。

貨物船で脱出、帰国

東京都 召田 房江

二十年七月二十六日夫応召、船舶運営会朝鮮木浦支社勤務の当時は、撃沈された船員の救助に多忙な日々を過ごしていた。行先不明のままの出征。二日後の二十九日、次女誕生、三歳の長女と三人になり、すっぽりと穴があ

いたような淋しさを埋めてくれた。が敗戦のいろ濃く不安が押し寄せる。八月十五日終戦の詔勅、街は騒然となり、青年達の日本人帰れの夜を徹しての不穏、殺人事件の発生、銀行の包囲、ばりばりとガラスの割れる音、とても近づけない。お手伝いさんは日本人の家にはこられませんかやめた。植民地支配下の抑圧に対して、一気の爆発だ。親しく物を売り買ひした人間同士だったのに。戦争の怖さを痛感。

「日本の警察安泰なり」と空よりピラ、しかし親しいお巡りさんがお別れにくる。引揚げた家から、近所はあき家になる。楽しく遊んだ海が魔物となって吠えている。船を探しに歩く。知人もたずねた。皆自分のことで精いっぱい。反対に、同郷の知人より四人の子どもさんを頼まれた。八月三十一日、夫が敗戦兵の姿で帰る。地獄で仏とはこのことと子どもと喜んだ。

危険を感じ、早く木浦から脱出しようと、数日の船探しがようやく百屯の不良貨物船に乗船と決定。この間もデマはデマを生み、街は無秩序となる。木浦を出る九月八日朝、好意で貰った方一の時の劇薬らしきものを使所

に捨てた。庭ではあき家になるのを待って奪いあいの大げんか。着のみ着のまま追われる。親子四人揃ったおじの乗船はほっとした。お預かりした四人の子どもさん、兵隊さん十数人と全員で七十人余、にぎやかなはずが、重苦しい空気、ときどき敵機の偵察、そのたび、荷物の中に身をひそめ、息をとじる。

兵隊さんからの毎食一個のおにぎり梅干しの配給はありがたかった。十日目頃、玄海灘で大きな台風にあう。木の葉のような船はかろうじて九死に一生を得る。半月ぶりに島根県に上陸し感激、生きていたんだ。電気なし、便所なしの船で皆ほこりにまみれ、貨車で荷物のように詰めこまれ、長野へ向かい闇をひた走る。長女高熱で心配する。十月一日、二十三日ぶりに故郷の四賀村着。皆にあたたかく迎えられ、興奮して眠れなかった。

この村の静さ、何事もなかったように平和そのもの、昨日まで死と紙一重で長い幾月もがふしぎだ。十月の信濃は寒い。十六人家族の生活が始まる。産後の無理と栄養失調のため、高熱、目の衰弱になり、苦勞した。目は未だ尾を引き医師通い。二十二年三月、焼野が原の新宿

のバラックに落ちつく。天国だった。

夫は神田青果市場勤務。三年目に池袋に苦勞と借金で小さい家を見て、三十年ぼつぼつ夫に休養を考えて欲しいと思った五十七年と六十一年に病で倒れ、入退院のくりかえし、不自由な体となり、余儀なく家の建てかえまた借金。ふりかえるとき、悲しみのうちにも神仏の加護に感謝し、余生を戦争のない平和を願いながら全うしたい。

元山から恐怖の逃避行

岐阜県 青木 幸代

父は、北朝鮮の各郡庁、道立元山病院の事務局勤務を最後に定年退職し、老後は元山青果市場の事務所に通っていました。

父と十五歳の姉と、十二歳の私の三人。母は敗戦の前年に病死し、兄二人は兵役に服していました。

戦況が厳しくなってきたことを実感したのは、葛麻半

島に飛行隊が設置され、軍用機が飛びかい、陸海軍の兵隊が多く見られるようになったこと、空襲による類焼を防ぐために、鉄道沿線や街の密集地の家屋が強制移転され、取りこわしが始まったこと、防空壕が作られたり、米軍機による偵察機の飛来が始まったことなどからでした。

敗戦の年の三月、大村女子商業へ進学しました。ほとんど授業はなく、近くの農場で、ジャガイモづくりの作業がつづく毎日でした。

終戦の詔勅を聞いたのも、その農場でした。放送は雑音のため聞きとりにくく、内容も理解できませんでした。

敗戦による国家の権力が消滅したことにより、遠い異郷に放りだされた生活ほど、身を刻むような耐乏生活の苦しさ、命を削りとられるような不安におののく生活はありません。

老いて持病の喘息の父と、幼かった姉妹は、乏しい家財を売っては、少量の食料を入手しなければなりませんでした。